

令和元年6月18日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02315

研究課題名(和文) 18世紀イギリスにおける社交空間/消費空間誕生に関する歴史的研究

研究課題名(英文) The Historical Research of Social/Consumer Sphere in the Eighteenth-Century England

研究代表者

吉田 直希 (Yoshida, Naoki)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：90261396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀に商業化した文化がハーバース流の理想的ブルジョワ公共圏にどのような影響を与えているのかを解明するため、一般には娯楽、余興として受け入れられてきた、いわゆる「低級な」文化が、当時の舞台、雑誌、文学、絵画、演劇において、どのように販売されてきたのか、またこの種の商業文化に「公衆」がいかに関与していったのかを検討した。この研究により、文化の商品化と消費空間の誕生が、文学という独自のジャンルを生み出すとともに、経済学という学問の誕生を可能にしたことが解明された。さらに宗教と科学的自然理解とが複雑に絡み合い、消費空間においてジェンダー、セクシュアリティの差異が重要になったことも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

18世紀啓蒙主義は、古くて新しい研究テーマである。カントの「啓蒙とは何か」という問いかけに対する最新の解答が、クリフォード・シスキンの18世紀啓蒙主義に関する最近の代表的研究 *This is Enlightenment* (2010) に収められているが、この思想の現代的意義を経済/科学/宗教の相互関係の観点から論じた研究はこれが初めてであり、ジェンダー、セクシュアリティの問題を含む発展的テーマを多く提示する点で独創的である。

研究成果の概要(英文)：In this historical research, I have examined how the popular culture of the eighteenth-century England has influenced the bourgeois public sphere which Jurgen Habermas thinks is an ideal community. Along with the process of proliferation of so-called low culture in many realms such as stages, magazines, books, paintings, and performances, the public could get access to a wide variety of literary products of popular culture. From this research, we can find that the commodification of culture and the rise of consumer society could make it possible for the literature and economics to establish itself as a distinct genre. I have also clarified how the issues of gender and sexuality come to be more significant because of the complexity of the contemporary religious and scientific debate of nature.

研究分野：英語文学

キーワード：公共圏 英文学 経済学 消費 社交

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

18世紀啓蒙主義は、古くて新しい研究テーマである。カントの「啓蒙とは何か」という問いかけに対する最新の解答が、クリフォード・シスキンらによる18世紀啓蒙主義に関する最近の代表的研究 *This is Enlightenment* (2010) に収められているが、この思想の現代的意義を経済/科学/宗教の相互関係の観点から論じたものは皆無であった。そこで1680年代のコーヒーハウス文化からフランス革命後の国民意識の高揚までを視野に入れ、イギリス公共圏文化を多層的に捉え直すことを最大の目的として本研究を開始した。とくに、経済学と近代科学という同時代の新たな知のシステムとメソディズムによる新たな宗教改革との共存・分離関係に焦点を当てて研究を進め、多様な起源を有する公共圏文化の歴史的な重層性を明らかにしようと試みた。

2. 研究の目的

18世紀初頭のイギリスでは、宮廷や教会の権威が比較的弱く、公平無私な「公衆」が次第に文化形成の中心的役割を担うようになった(ハーバース)と考えられてきた。もちろん、この合理的な公衆は悪徳に満ちた「私」と表裏一体であり、公私の緊張関係に焦点を当ててみるならば、上品なブルジョワ知識人がこの時代の文化的空洞を埋め合わせるべく俄に登場し、近代イギリス公共圏が誕生したと単純に考えることはできない。本研究では、*This is Enlightenment* を批判的に検討することにより、公共圏誕生の複雑な歴史性を解明し、同時にその担い手である近代的主体の特性を文学研究の視点から実証的に解明することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 公共圏文化の歴史を経済・科学・宗教の観点から検証するために、以下の4点を分析テーマとして取り上げた。文化の商品化と消費空間の誕生 経済学と文学の専門化 宗教における禁欲と近代科学における自然理解 文化とセクシュアリティ

(2) 27年度は 文化の商品化が消費空間の誕生に果たした役割を明らかにするため、新しい都市文化を求める動きの中でコーポレーションやさまざまなアソシエーションが果たした役割を検証した。また、消費空間の多様性をヴォクソール歓楽園とヘンデル、トマス・アーン、ホガースの演目、ジェイムズ・ラッキントンによる量販古本業と女性読者に焦点を当てて考察すると同時に、経済学と文学の一体化を特徴とするデフォー、スウィフトの作品群を取り上げ、イギリスでの信用経済を推進した「小説」の役割について歴史的に検討した。28年度は、経済学と文学が分離へと向かう歴史的過程をアダム・スミスの道徳感情論を中心に検討を行った。そして、

18世紀中庸のメソディズム運動を取り上げ、宗教における禁欲の表象が近代科学の自然理解とどのような関係を結んでいたのかを明らかにした。特に、精神の物質性に関する議論がなぜ同時代の「悪徳」に結びつけられていたのかを考察した。29年度は、公共圏における女性の二面性(消費者/商品)について検討した。文化の創造者としての理想的女性像がいかにして作られ、また同時に女性化する文化に対する痛烈な批判が公共圏内でどのように議論されてきたのかを検証し、ハーバース流のホモソーシャルな公共性概念を柔軟に切り開いて行くことを試みた。

4. 研究成果

(1) 18世紀になってはじめて、文化は商品としての価値を持つようになったが、商業化した文化がハーバース流の理想的ブルジョワ公共圏にどのような影響を与えているのかを解明するため、27年度の研究では、娯楽、余興として受け入れられてきた、いわゆる「低級な」文化が、当時の舞台、雑誌、文学、絵画、演劇において、どのように販売されてきたのか、またこの種の商業文化に「公衆」がいかに接していったのかを検討した。分析した資料は Ned Ward, *The*

London Spy, Part X (1703)や *Wat Tyler and Jack Straw; Or, The Mob Reformers* (1730)を中心としたが、Eighteenth Century Collections Online から適宜必要なものを補充した[*Order of the Court of the Common Council* (1700) ; *The Pigs Petition against Bartholomew-Fair* (1712) ; James Lackington, *Memoirs written by himself* (1790)]

(2) また文化の商品化は、イングランドにおける信用経済をめぐる新しいジャンル、すなわち経済学の誕生と密接に関係している点を明らかにするため、デフォーの初期の諸作品 [*The Complete English Tradesman* (1726) ; *Essay on Public Credit* (1710) ; *Essays upon Several Projects; or, Effectual Ways for Advancing the Interests of the Nation* (1702) ; “ A True Relation of the Apparition of One Mrs. Veal . . . to One Mrs. Bargrave. ” (1706) ; “ The Villainy of Stock-Jobbers Detected and the Causes of the Late Run upon the Bank and Bankers Discovered and Considered. ” (1701)] を取り上げ、18 世紀前半において、経済 / 文学が未分化の状態にあった点を歴史資料とともに確認し、次年度の研究のための準備を行った。

(3) 28 年度の研究では、経済と文学の共存関係から分離独立へと向かう歴史的推移を検討することにより、文化の商品化が公共圏に与えた社会的影響について理論的考察を行った。18 世紀後半には、信用経済を推進する市場拡大の流れの中で、経済 / 文学は徐々に互いに他を差別化ようになっていくが、文学と経済が決定的に袂を分かつのは、ワーズワース、コールリッジらによるロマン主義以降であることが実証的に解明された。さらに、「想像の快楽」を主張するアディソン、シャフツベリー、さらにはバークに共通する中立的、抽象的な快楽一般を追求する美学に関する文学的言説を対象とし、商品化された文化とは異なる種類の、いわゆる「上品な」文化の創造についても考察した。その際、ボイルやニュートンが主張する「自然の法則」を比較対照し、18 世紀の科学 / 文学が「精神」という目に見えない存在をどのように考察するに至ったのかを歴史的に検討した。18 世紀啓蒙主義を理解する上で最も重要なのは、「意識を物質的に説明しようと試みた」先駆的科学者の思想であることが明らかになった。当該年度の研究では、デイヴィッド・ドイッチュの理論的研究を背景とし、近代科学思想と快楽の誕生について考察を重ねていった。

(4) 29 年度の研究では、女性の欲望、想像力、快楽、美德をめぐる様々な言説を対象に、公共圏における近代的主体の歴史性について、ジェンダーの観点から検討した。ハーバースの公共圏概念では、女性がこの文化圏にどのように参加してきたのかが明確になっていなかった。文化の商品化について考える際、消費者としての女性の役割、そして消費の対象としての女性の役割を見逃すことはできないことは明らかである。「展示され、消費されることを欲望する女性」を作り出す、と同時に制御することを目指す 18 世紀公共圏文化の複雑な力関係を解明するために、女性の感受性に焦点を当てて、ホモソーシャルな公共性概念を柔軟に切り開く可能性を模索した。

(5) 以上のように、27 年度の基礎的な作業を踏まえ、歴史的・理論的資料を補完しつつ、続く 3 年間で具体的なテキスト分析を行った。主に以下の 3 点について研究成果をあげることができた。経済学と文学が分離へと向かう歴史的過程をアダム・スミスの道徳感情論を中心に検討を行った。従来の文学史の見方によれば、18 世紀後半に、信用経済を推進する市場拡大の流れの中で、経済 / 文学は徐々に互いに他を差別化ようになっていったと考えられてきた。

そして、文学と経済が決定的に袂を分かつのは、ワーズワース、コールリッジらによるロマン主義以降であるとする見方が支配的であったが、スミスの感受性理論を 18 世紀道徳哲学という大きな流れの中で再評価すると、文学、特に感受性小説の中では、感情の商品化とでも呼べるような言説が確認できることがわかった。ここからさらに、「想像の快楽」を主張するアディソン、シャフツベリーさらにはパークに共通する中立的、抽象的な快楽一般を追求する美学に関する文学的言説も商品化された文化の再現を追求している可能性が確認できた。18 世紀中庸のメソディズム運動を取り上げ、宗教における禁欲の表象が近代科学の自然理解とどのような関係を結んでいたのかを明らかにした。特に、精神の物質性に関する議論がなぜ同時代の「悪徳」に結びつけられていたのかを考察するために、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』を精査し、従来否定的に描かれることが多かったメソディズムの「熱狂的感情」の肉体性・快楽性を明らかにすることができた。ハーバースの公共圏概念を再検討する過程で、女性がこの文化圏にどのように参加してきたのかを明らかにした。「展示され、消費されることを欲望する女性」を作り出す、と同時に制御することを目指す 18 世紀公共圏文化の複雑な力関係を解明するために、都市生活の消費問題を中心に検討した。具体的には、New Ward の *The London Spy*、Tom Brown の *Amusements, Serious and Comical*、*The Town Spy: or, A View of London and Westminster*、T. Legg の *Low-Life*、Richard King の *The Frauds of London Detected* 等を精査し、男性の視点から描かれる都市生活の中で女性の視点が多層的に取り込まれていることが明らかになった。次に、Bartholomew Fair 等の市やそこで催されるさまざまな出し物(演劇や演奏会等)の表象を通して、女性による消費が文化構築にますます不可欠になっていった過程を分析することができた。さらに、期間延長後は、初年度に取り上げた公共圏文化の歴史性を再検討し、特に経済と宗教の観点から 18 世紀の消費空間でますます重要になってきた軍事財政国家の問題を明らかにした。具体的には 1720 年以降ウォルポール政権下でなされた経済政策が対フランス外交政策と緊密に絡み合い、軍事費の増大を可能にした点に注目し、この時期の文化の商品化が近代経済学の誕生を推進していた点を複数の文学テキストによって再確認した。具体的には、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』やスウィフトの『ガリヴァー旅行記』に顕著に見られる諷刺を外交史、軍事研究、経済学史の関連資料とともに精査することにより、文学の政治性(ホイッグ史観)を明らかにした。次に、28 年度に行った アダム・スミスの道徳感情論を 18 世紀道徳哲学という大きな流れの中で再評価し、文学、特に感受性小説の中では、感情の商品化とでも呼べるような言説が確認できることをマッケンジーの『感情の人』によって精査した。さらに、メソディズム運動における禁欲の表象が近代科学の自然理解とどのような関係を結んでいたのかをフィールディングの作品によって検討し、メソディズムの「熱狂的感情」の肉体性・快楽性を再確認した。その上で、研究成果の公表を日本英文学会東北支部のシンポジウムと日本ジョンソン協会の論集にて行った。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

吉田直希、「熱狂する感受性」、『東北ロマン主義研究』、査読有、第 4 号、2017、49-63

〔学会発表〕(計 2 件)

吉田直希、「感じるジャコバイトー近代資本主義の小説的特質」、日本英文学会東北支部第 73 回大会シンポジウム「モダニティの問題としての“dissociation of sensibility”を再考する」、2017

吉田直希、「熱狂する主体の多層性 小説的 feeling-body へのアプローチ」、第 7 回東北ロマン主義研究会シンポジウム「長い 18 世紀における Sense(s)の系譜」、2016

〔図書〕(計 1 件)

吉田直希 他 “Female Gaze and Male Sensibility in *A Sentimental Journey*”、査読有、『18世紀イギリス文学研究』第6号、2018年、70-92

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。